

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*** 昔懐かしい「上皿棹秤(うわざらさおばかり)」**

アーカイブの仕事で収蔵した中に「上皿棹秤」がある。この名称が正しいかは責任が持てないでいたが、インターネットで検索すると「上皿棹秤(うわざらさおばかり)」というのが出てくるから、これで通用するのであろう。今どきの人は見たこともないであろうが、なかなか重厚な美しい姿をしている(写真1)。筆者が幼少のころ、近くの「何でも屋」の店で砂糖とか、塩の量り売りで使っていたものである。天文台では郵便の目方を計るために使っていたのを覚えている。



写真1 上皿棹秤



写真2 移動錘(重量読み取り)



写真3 ゼロ点調整ねじ

計りたいものを写真1の右の皿にのせ、分銅を左の分銅載せに載せ、棹の部分のスライドする器具(移動錘)を左右に移動させ棹が水平になるところで移動錘の右端の目盛りを読むのである(写真2)。

いろいろな工夫があり、上皿に何も載せないで、分銅も載せないで棹が水平に浮いた状態になるが、その微調整ねじがある（写真3）。

この上皿棹秤には分銅が、100g用が2個、200g用が1個、500g用が1個、1Kg用が1個ついている（写真4）ので最大2Kgまで計れる。分銅を全く使わなければ、0～100g迄、100gの分銅を1個使えば100～200gが計れ、2個使えば200～300gが計れる。100gの分銅1個と200gの分銅1個を使えば300～400gが図れるというように、分銅を100gごとに増やしていけば、0～2000gまで1g単位ではかれる優れものなのである。



写真4 4種類、5個の分銅（1Kg1個、500g1個、200g1個、100g2個）、写真5が分銅の置き場と5個の分銅である。



写真5 分銅置き場の分銅

「何でも屋」で量り売りをする際、分銅と目盛り錘の位置を決めておいて計る重さを固定して、砂糖などを小さなシャベルで増やしたり減らしたりできる目盛り錘（移動錘）を固定することもできる。写真6の移動錘の下に固定用ねじがついている。



写真6 下のねじで移動錘は固定できる

今では、上皿秤は、写真7のような針が振れるものか、デジタルの目盛りのもの（写真8）であろう。



写真7



写真8

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp